

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2016

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2016



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

はじめに

近年、山形で起業をしたり、仕事の拠点を設けたりする若い方が増えてきています。この大学を卒業したOBやOGたちの中にも、一度は地域外で就職した後、また山形に戻ってきて自分達で小さくても魅力的な活動を始めるという例が多く見られます。その流れと呼応するように、空洞化が見られる中心市街地の古い建物をリノベーションして活動の拠点にするという動きも活発化してきました。初めは点として穿たれた小さな活動は、お互いに刺激しあい、少しずつ連携し、大きなうねりとなってまちを変えゆく。そんな変化が、かたちとなって見え始めています。これまで地域の中で持続してきたリノベーションの活動が地域の方々に理解され、TONGARIビルのように事業化されるものが現れ、少しずつ拡大、流布されてきています。

このような中で、地域の方々に助けられながら学生たちが自ら手を動かし、様々な社会の仕組みを駆使し、場所を立ち上げるという活動がいくつか始まりました。それらは大学院生の研究活動の中に位置づけられたり、学部生の課外活動だったりするのですが、共通しているのは組織に過剰に頼ることなく、自主的に動き、予算を集め、ときにはリスクを負うことを引き受けていることです。自分達が欲しい場所は、自分達で立ち上げる。そんな姿勢には、同時代的なリアリティを感じます。

今年度の年報では、オープンして1年目のTONGARIビルのプロジェクトを軸として、広まりつつあるエリアリノベーションの経緯と今後の展開について特集しました。また、本年報に掲載している演習課題や各研究室での学内外での活動も、これからのまちや環境の在り方を深く問う内容となっています。

先日、小学校の設計課題に取り組んでいる学生から、こんな質問が出ました。「これから、私たちが新しい小学校を設計することがあり得るのでしょうか？」子供が減り、人口が減る。そんな社会を現実として受け止めている学生達は、これまでのただ建て続けてゆく建築の枠組み自体に疑問を感じているようです。演習課題の成果や卒業制作のテーマからも、そんな時代のリアリティが垣間見えます。この国の未来の姿に希望を抱けないことが当たり前となっている学生達。しかし、それでも自ら演習課題や学外での様々なプロジェクトに取り組み、制作の過程で様々なことに気付き、考え、産み出された新たな提案には、どれも希望を感じます。建築やランドスケープという分野を通じて身近な生活やまちの在るべき姿、地域の気候や植生に寄り添った環境の在り方を学び、この世界を見つめるトレーニングをした学生達の能力を活かせる場は、必ずあるはずだと思うのです。この世界には、まだまだやるべきことがたくさんあります。

ここでの学びを通じて、学生達にはまだ体験したことのない縮小局面に於ける未来の姿をポジティブに描ける、そんな大人に育ってほしいと思っています。

(西澤高男)

目次

特集

今回の特集記事には、エリアリノベーションによって魅力的な場所へと変わり始めている山形の中心市街地を取り上げます。リノベーションによって産み出された小さな活動の場が面的にネットワークされてゆくまちの姿とその経緯、そして今後の展開について、仕掛人である本学科教員の対談をもとにまとめました。

また、このような動きと呼応して、学生たちが自ら立ち上げたプロジェクトも始動しています。閉店していた伝統ある書店の再生を手掛けた2人の学生達にも、お話を聞いてみました。

山形でエリアリノベーションの可能性を検証する 6

郁文堂書店 —おばあちゃんと学生たちのリノベーション物語— 9

教育報

年度ごとに、演習課題を中心とする教育の成果をまとめています。

1年生では、これまでのデッサンや造形の基礎、図学・製図やCADの習得、施工体験に加え、短期間で具体的な空間を立ち上げるトレーニングをカリキュラムに組み込みました。

2年生は、住宅設計課題から始まり、その外構となるランドスケイプを続けて設計することで、建築内外の一体的な計画に取り組みます。後期では建築や環境をデザインしてゆく上で欠かせない現地フィールドでのリサーチ活動や、世の中の事象を多面的に捉えて建築空間に昇華させる課題を設定しました。

3年生は、少人数のスタジオ課題となり、学生の興味や関心、進路に併せて課題を詮索します。建築とランドスケイプ、いずれの分野でも、地域の同時代的な問題を扱う課題が設定されています。

そして4年生では卒業研究に取り組みます。前期で課題設定をして調査した内容をもとに、後期で卒業論文、あるいは設計へとまとめてゆきます。

1学年 建築・環境基礎演習 10
インテリア基礎演習

建築・環境施工演習 11

2学年 住宅の設計 12
住宅の外構

フィールドワーク入門 13

クリエイティブ演習 14

3学年 自給的コミュニティと産地直売所のデザイン 15
生産の場となるランドスケイプと建築

野生化する都市 16

地域の景観・歴史から読み解くSHOPの設計

| | |
|---------------------|----|
| 素材と風土で考えるギャラリーの設計 | 17 |
| 地域コミュニティの核となる木造公共建築 | |
| まちの中に住むかたち | |
| まちの自然エネルギー計画 | |

| | |
|---------------|----|
| エコハウスの設計 | 18 |
| 都市と劇場 | |
| 温浴施設の設計 | |
| ランドスケープ総合デザイン | |

| | |
|--------------------|----|
| 気仙沼市大沢地区復興支援プロジェクト | 26 |
| 蔵王ジオラマ模型の製作寄贈 | |

| | |
|--------------------------------------|----|
| 上桜田米づくりプロジェクト | 27 |
| 大江町左沢高校文化的景観ワークショップ 「みんなで考える左沢検定」 | |

| | |
|-------------------------|----|
| 小屋づくりプロジェクト | 28 |
| 森づくりの会 | |
| タウン・ワークス | |
| 東北芸術工科大学校友会15周年記念「大同窓祭」 | |

研究報

各研究室や学生・有志によるプロジェクト、各種講演会や出版、執筆活動等の概要について掲載します。

地域と密着した活動が多く、かつ持続することで、地域の方々と共に目指す方向に変えてゆくきっかけとなっていることが、本学科の学外プロジェクトの特徴であると言えるでしょう。

| | | |
|----------------|-----------------|----|
| 各種講演会 と執筆活動 | ワンデイプロジェクト 西田司氏 | 29 |
| | 環境的未來型 三浦丈典氏 | |
| | 第3回復興支援連絡会 | |

| | |
|-----------------------------|----|
| あたらしい家づくりの教科書 | 30 |
| エリアリノベーション ／変化の構造とローカライズ | |
| 世界の田園回帰 | |

| | | |
|---------|---------------------------|----|
| 卒業研究・設計 | アズ七日町を拠点とした コミュニティの再構築 | 19 |
|---------|---------------------------|----|

| | |
|-------------|----|
| 断熱リフォームの可能性 | 20 |
|-------------|----|

| | |
|----|----|
| 総評 | 21 |
|----|----|

| | | |
|---------|----|----|
| 修士研究・設計 | 総評 | 22 |
|---------|----|----|

| | | |
|--------|----------------------------|----|
| プロジェクト | 飯豊町エコタウンプロジェクト | 23 |
| | 江差町「職人の棲家」 ゲストハウスプロジェクト | |

| | |
|----------------|----|
| 山形R不動産 | 24 |
| リノベーションスクール@鶴岡 | |

| | |
|--------------|----|
| ツリーハウスプロジェクト | 25 |
| 蔵プロジェクト | |

山形でエリアリノベーションの可能性を検証する



1階では、食堂「nitaki」と本屋&雑貨店「十三時」が日々賑わいを見せる（左上）

KUGURUでのイベントの様子（左下）

1周年イベントの様子。多くの来場者で賑わった（右上）

4月8日に行われたTONGARIビル1周年イベント（右下）



竹内昌義教授



馬場正尊教授

エリアリノベーションとは、まちを良い方向に変えてゆくための小さな活動をネットワークすることで、大きな変化につなげてゆこうとするムーブメントのことである。まちの中で自分達の活動に見合った場所を獲得するために、自らが動き、汗をかき、建築のリノベーションをし、ときにはリスクを負う。そんな実践が、山形のまちをフィールドとして沸き起こり、そして続けられている。その活動の集積が、うねりとなって建築からまち全体を変えてゆく。卒業生や在学生たちも、このまちと主体的に関わり始めている。

活動の核となる「TONGARIビル」がオープンして1年。今、変化の只中にあるまちの様子とこれまでの経緯、今後の可能性について、検証してみたい。

聞き手：西澤高男

山形でエリアリノベーションをはじめたきっかけ

西澤 山形市中心部の七日町でのリノベーションと言うと、まず「ミサワクラス*1」が思い浮かびます。その後、いくつかのプロジェクトを経てTONGARIビルへと続いてくるわけですが、そのあたりの経緯や物件との出会いについて、お聞かせください。

馬場 山形R不動産を始めた頃、山形で何かを起こしたいと思っていました。そのときにあがった案件が休業していた「三沢旅館」の建物、後の「ミサワクラス」だったんです。あのときは、何か大学とまちとの接点をつくりたいと考えていて、その後続いた「花小路トラング*2」や、山形ドキュメンタリー映画祭と連携した期間限定の「アジアハウス*3」など、学生が直にかかわるリノベーションのプロジェクトを仕掛けました。

その後、リノベーションスクール*4を山形で実施した際、「洋傘のスズキ*5」「山形まなび館*6」「ミツマスビル*7」が対象建築としてあがったのですが、あの頃は上手く事業化出来なかったんです。もちろん、事業化するためのスキームは作っていました。

竹内 その積み上げがあったから、TONGARIビルが実現出来たんだよね。

馬場 TONGARIビルの話があがったときには、強力な同士を集めて畳み掛けました。竹内さんの突っ込み方がすごかったよね。

千歳不動産の水戸さん、BOTA coffeeを立

ち上げた佐藤英人くん。TONGARIビルとBOTA coffeeが同じシネマ通り沿いにあることから、シネマ通りを意識化してきたときに、経済産業省出身の高橋さんからは、中心市街地活性化事業*8という枠組みを聞いて、これだ、と思いました。これで神風が吹いた。

竹内 それから、キラーコンテンツとして、アカオニデザインの小板橋さん。その柔軟性に、随分助けられました。

やっぱり人と人との出会い、でしたね。佐藤英人くんは立ち上げの途中ですぐ近くに別の場所を見つけてBOTA coffeeをさっさと一人で立ち上げちゃったけど、それが却って広がりを生むことになった。BOTA coffeeができたことで、点が面になる可能性が示せたので、それはお互いに良かったなと感じます。

かわってゆこうとするまちの姿が意識化され始めた

西澤 TONGARIビルがオープンして1年が経ちましたが、どのようにまちが変わってきたと思いますか？

馬場 TONGARIビルに先立って完成したBOTA coffeeの佐藤くんは、大勢よりも自分自身でやってみたくなって、身軽な独立したプロジェクトとしてセルフリノベーションをして店を立ち上げた。その動きを見ていた学生達は、もしかしたら自分達でも出来るんじゃないかと考えるようになったのかもしれない。



4月に1周年を迎えたTONGARIビル



1階奥にある「KUGURU」は、クリエイターたちによって様々な表情を見せながら空間の姿を変えていく



3階にある「SUANA」はミーティングやワークショップなどにも使用できる

*1 ミサワクラス

休業状態となっていた「三沢旅館」を2009年にリノベーションして立ち上げたシェアハウス。共有スペースとなっているキッチンでは、展覧会やトークイベントも開催される。自分達の手で、自分達の住みたい場所をつくるというプロジェクトは、山形市中心市街地を活性化させるひとつの契機となった。

*2 花小路トラング

セルフリノベーションによるシェアハウス第2弾。かつては活気のある歓楽街だった花小路の空きビルを再生させた。

*3 アジアハウス

三沢旅館に隣接する三共ビルを活用した、期間限定のカフェ付きゲストハウス。山形国際ドキュメンタリー映画祭の期間中にオープンし、世界中からのゲストを迎え入れた。期間限定という

こともあり設えは簡素だが、惜しまれつつ解体されたシネマアサヒの椅子を用いたサロンや、映画のシーンを切り取った窓ガラスの演出など、固有の雰囲気をつくり出していた。

*4 リノベーションスクール

リノベーションのフィジビリティと技術を学ぶ実践的ワークショップ。建築家の嶋田洋平らによって2011年に北九州で始まり、今では全国各都市で開催される。山形市では2014年の夏に実施された。

*5 洋傘のスズキ

大型複合施設NANA BEANSの一区画で、約100年もの間、傘の販売や修理を行い、多くの人々に愛され続けていた老舗の傘屋跡地。当時、2階は住居として利用されていた。

*6 山形まなび館

山形で最初の鉄筋コンクリート建築である山形

第一小学校の旧校舎を保存活用した生涯学習施設。改修費と維持費を適正にするため、暫定的に1階と地階のみを使用しており、2階と3階は活用されるのを待つかたちで現在は閉鎖されている。

*7 ミツマスビル

かつてミツマススーパーの事務所として使われていた3階建ての建物。現在は1階にコンビニエンスストア、ブランドショップ、飲食店などが入り営業しているが、2階3階は空き店舗となっている。

*8 中心市街地活性化事業

国土交通省による支援策を活用した補助事業の総称。地方都市の中心市街地の衰退を食い止めるために、何度かの法改正を経ながら補助制度が設定されている。



デザイン事務所akaoniのオフィス風景



4階のTIMBER COURTのショールームでは、肌馴染むような温かみのある家具に出会える

「郁文堂書店*9」は、山形ビエンナーレ*10をきっかけに店のオーナーであるおばあちゃんとの距離が近くなり、クラウドファンディングでお金を集めてリノベーションをして店を再生させました。それから、2年生の学生達が自主的に空き店舗で仕掛けた一夜限りのイベント「R night*11」も、かなり盛り上がっていました。今は、まちが変わってゆこうとすることが意識化し始めてきているんだと思います。

竹内 山形の中心市街地って、意外と広いんだよね。建物単位で変化を促しても、なんだか薄まってしまう。その点、TONGARIビルのあるシネマ通りって、ちょうどいいスケール感なんだよね。

馬場 シネマ通りはずっと気になっていました。シネマが無くなってしまったシネマ通りを、設計課題の敷地とテーマにもしていました。その大きな欠落感が、ストーリーを生む結果となった。通りの長さが長過ぎないことも、却って良かった。

竹内 エリアリノベーションは、エリアの狭

さも結構大事だよな。

若い人がジャンプする余地があること

西澤 まちに変化を促すには、どんな要因が必要だと思いますか。

馬場 メンツとタイミング、そして必然性、かな。

竹内 TONGARIビル、そしてシネマ通りは、ちょうどその機が熟していたんだと思う。事業化のスキームもぼつちり出来ていたし。

馬場 そして、やっぱり人。理解のある大人と、若い人が活躍出来る余地が必要だと思う。

竹内 それが集まった結果として、リノベーションスクールで取り上げた物件が、そのまま実現したかたちとなったね。

パブリックスペースへの広がり

西澤 今後の展望と可能性について、教えてください。

馬場 まず、佐藤英人くんたちが、Sendai Coffee Fesのイベントに倣ってコーヒーフェスを実施する予定があります。今、4年生の学生たちが屋台をつくっているけれど、そ

れでシネマ通りを「ストリートジャック」してしまおう、と。

竹内 演習課題*12で原寸大の屋台をつくっていた学生で、ちょうどそんな風景をドローイングに描いていたけれど、それが実現するかたちになるね。

馬場 BOTA coffeeも路上に少しずつ展開しているけれど、パブリックスペースに広がってゆくことで、より強くまちの変化が意識化されてゆくんじゃないかな。

竹内 今後は、コンテンツの種類とパリエーションが大事だよな。自転車屋さんとか、カレー屋さんとか。

馬場 そして今は、宿泊施設が待たれているんだと思います。是非、実現させてみたいですね。

西澤 居場所が増えてゆくことで、魅力的なまちになりそうですね、楽しみです。ありがとうございました。

*9 郁文堂書店

山形市七日町で開業していた書店。1933年開業したが、店主の高齢化により閉店していた。山形ビエンナーレでのイベントをきっかけに、再生プロジェクトを実施中、2017年5月31日にリニューアルオープンした。

*10 山形ビエンナーレ

東北芸術工科大学が主催し、山形市中心市街地で2年に1回開催する、現代芸術祭。2014年より始まり、ここでのイベントは2016年第2回での

実施となった。

*11 R night

建築・環境デザイン学科2年生が中心となって空き店舗で開催された一夜限りの仮設イベント。トークやライブなど様々なプログラムが用意され、ここでの共有体験は、来場者に対して場所の持つポテンシャルと可能性を顕在化させる。

*12 演習課題

2016年度前期に行った3年生の演習課題「自発的コミュニティと産地直売所のデザイン」。自給

的コミュニティを象徴するとも言える産地直売所は、地域性や人口規模、その存在の目的によって様々なかたちに変化していく。物だけではなく人々の気持ちや活動をつなぎとめる場、そして装置として捉え、その存在価値と具体的な空間やメディアを自由な発想でデザインする設計課題である。



1年間3人一緒に掃除をし、食事をし、対話をし、今では家族のような本当の関係
芳賀耕介、山形県出身（左）／オーナーの原田伸子さん（中央）／追沼翼、宮城県出身



学生達のセルフビルドによって新しい姿に生まれ変わった郁文堂書店

郁文堂書店は、1933年に開業した老舗の本屋だった。かつて齋藤茂吉や司馬遼太郎も立ち寄っていたと言う。創業以来の店主であった原田吉則さんが亡くなってから、妻の伸子さんは注文販売を続けながらも、お店のシャッターは静かに下ろすこととなった。約10年もの間シャッターで閉ざされたその建物に、異様な魅力と可能性を感じ取ったのは、当時建築・環境デザイン学科3年生だった追沼翼くんと芳賀耕介くん。2名の手により、「新生・郁文堂書店」として、歴史的な文脈を残した新しいスタイルの書店＝本を介したコミュニケーションの場に変貌を遂げた。

最初のきっかけは、「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ」。郁文堂を会場のひとつにしようという話が上がり、まずは店内の片付けから始まった。当初あまり乗り気ではなかった伸子さんも、山形ビエンナーレ限定オープンを皮切りに、「まちのためにこの場所を役立てたい」と、学生たちの夢プランを実現させることに意欲的になったそう。

「お金については心配しなかった（笑）」と2人は笑いながら話す。クラウドファンディングで100万円を集め、返礼品や銀行の振込手数料にかかった分を差し引くと、工事にかげられた金額は70万円ほど。オーナーさんにも一部協力いただいて、なんとか工事費用を賄ったそうだ。「天井や土壁に空いている穴の補修、電気工事は業者の方にお願ひしました。天井の塗装や看板など自分達でできるところは周りに教えてもらいながら施工しましたね」と、今ではその怒涛の日々を懐かしむように話す追沼くん。「全面土間だった空間に、靴を脱いであがれる場所をつくりたくて一部フローリングスペースをつくったり、新設した壁を白く塗装したり、既存の壁は逆に塗装をやすって

剥がしたり。ワークショップ形式を取りながら、様々な人達と作業していきました」。常に丁寧な作業をしてきた芳賀くんの思い入れが感じられる言葉だ。綺麗になるにつれて、かつての常連さんだけでなく通りかかった若い人も「ここ、何?」と覗いていくことが多くなり、伸子さんもだんだんノッてきたと言う。

81歳のおばあちゃんと学生、というミスマッチな組み合わせで、地域の人々には面白がってもらってるそう。「今後は、継続の仕方が課題」と話す2人。「やっぱりボランティアでは続かない。実務も多いため、サークル感覚の軽い気持ちでは受け渡せないところがある」と、真剣な顔つきだ。現在、持続的に収益をあげられる仕組みを構想中とのこと。

クラウドファンディングとセルフビルドにより、組織や補助金とは独立したプロジェクトのプロセスには、新しい時代のエリアリノベーションの可能性を感じられる。これから、空き物件とアートとをつなぐ企画もぞくぞくと発信されていくことだろう。学生たちの地域に根ざした取り組みは、確実にまちの風景を変えていく。



リノベーション後、空間は一気に広がり明るくなった。裸足であがるフローリングが気持ち良い

1学年 建築・環境基礎演習

建築・環境基礎演習は、学科に入ってから1年生が最初に取り組む演習課題である。建築や環境を学習するにあたりその基本となる観察力と表現力を養うプログラムとして、例年デッサン、クロッキーに取り組む。デッサンでは、基本立体として直方体、円筒などを中心に形をつかむ訓練、ガラスや木造など質感を描き分ける練習、モチーフの配置を変えて立体の配置、位置関係の特徴を直感的に捉える訓練などを行なっている。クロッキーでは、風景や人物を中心に、最終的にはヌードクロッキーを実施し、短時間で形を捉え直感的に表現する技術と感覚を経験させている。後半ではケント紙やスチレンボード、檜棒材を用いて基礎立体を制作する立体構成を行い、模型制作の基礎体験と材料や道具の扱いに慣れる機会を作っている。7週間でクロッキー帳2冊を消費する徹底した描く機会は、2年次以後の演習課題の成果表現時に確実に経験効果として現れてきており、設計、計画に際して有効な基礎的力を養う演習になっていると思われる。(志村直愛)



デッサンでモノを捉える力と描く力を鍛える



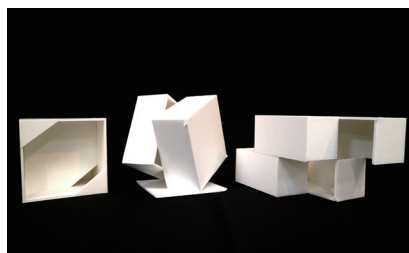
立体構成で模型制作の基礎を身に付ける

1学年 インテリア基礎演習

本演習は3次元、空間を扱う。デザインの中で3次元を扱うのはプロダクトデザインと建築・環境デザインだが、プロダクトは場所を特定しないある対象物であることに対し、建築・環境デザインで扱う場合は、場所があり、そして囲まれる空間であるところが大きく異なる点である。今後設計を行なっていく上で、場所性は様々な視点から捉えなければいけない要素のひとつとなってくる。今回、1年生の早い段階で設計のベースを訓練することを目的に、キューブ状の空間を与え、“囲まれる空間”のスタディをしながらその可能性を考えてもらった。最初は、2.7mキューブ、それを5.4mと大きくしていく。用途に関しても最初は茶室から始まり、住宅と大きくしていく。空間とダイレクトな関係を取れるよう、図面表現ではなく模型でのスタディを求めた。ポイントは人の点景。これがあると抽象的な模型も、人の活動が想像しやすくなる。様々な原初的な空間が立ち上がり、学生の意欲がうまく空間に展開できているように感じた。青森県弘前市の建築家、蟻塚学さんとの共同授業である。(竹内昌義)



2.7mキューブから茶室のかたちを考える



5.4mキューブにワンアクション加えて造形を生み出す

建築や構造物の設計では、素材の特性や使い方を理解していることが必要である。この演習では、設計の前段として、素材を理解し、素材の特性から施工方法を考案することや、目的の構造物に見合った材料を見出すことを体感的に学ぶことに重きを置いている。演習は大学近隣のフィールドで行われ、環境や素材に触れながら、実際に構造物の制作を通じて学ぶ。

今年度は、近隣の都市公園内において樹林地の下刈りや枝打ち、スギの民有林においての間伐、これらのフィールドから発生した資材（主に木材）を材料として、粗朶柵（そださく：樹木の枝を編み込んだ柵）や丸太による階段、休憩施設（ベンチ）の設計・施工を行った。これらは、起伏に富んだ地形の中（公園の一角）に、空間を読み込んだ上で形や大きさが検討され、設置された。この他にも、模擬的な施工体験として石積みや、素材研究としてスギ間伐材を用いたカトラリーの制作（個人作業）を行った。

作業のほとんどはグループによって進められる。作業内容の相談や力仕事の分担など、協力して問題を解決する能力を鍛える。また、もうひとつ演習の重要な作業として日々の記録がある。学生は野帳（フィールドノート）を常に傍らに置き、作業経過や日々の気づきを自分のための情報として記録する。野帳は現場でのコミュニケーションにも用いられ、イメージを描きながら設計の検討などを現場で行う。

このように、実際に構造物を設計・施工することを通じて環境デザインの考え方、建設の基本事項、自然から資源を得て利用する人間活動の本質を理解し学ぶ。（渡部桂）



粗朶柵（そださく）の施工



スギの間伐作業



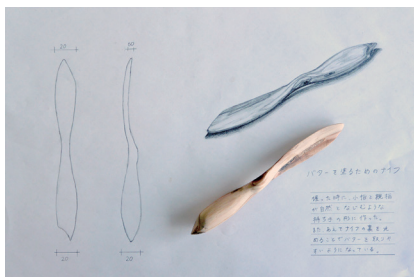
1



2



3



4

1 階段の施工

間伐したスギ丸太を用いた階段の施工。人が上り下りするには急な斜面に、足がかりとして設置しているが、風景を引き締める役割も果たす。

2 現場での記録

フィールドで持ち歩く野帳。現場で見聞きしたこと、気がついたこと、疑問に思ったことなどを書き込んで、自身のための基礎的な情報として蓄積する。

3 石積み

模擬的な石積み。石材を円錐状に積み上げてみる。石の重心や噛み合い、裏込め（碎石）の役割などを確かめながら、木材とは違う素材の扱いを知る。

4 素材研究

間伐材によるカトラリー制作。木を削ることで、木の手触り、木目の流れ、節の存在などに気がつく。この作品は節を意匠に取り込んでまとめている。

2学年 住宅の設計

2年生の最初の課題は住宅である。特別講師3名と教員1名の4名でエスキースを受け持つ。敷地は芸工大の目の前に位置する芸工大公園。公園を分譲地に見立て、10区画に割り振られた敷地の中で、それぞれが住宅を設計する。本課題の終了後には、設計した住宅の外構をデザインするランドスケープの課題に発展する。学生達は条件は少しずつ違うものの、比較的余裕のある敷地に住宅を構想することとなる。ゾーニング、プランニング、断面図を考え、全体をデザインする。模型を使いながらエスキースを進めるが、初めての総合的な作業なので苦労している学生も多くいる。建築設計を生業としているOBが特別講師として設計の指導に当たるのも本演習の特徴だ。

最優秀案は中川広海の商品。四角いボリュームを組み合わせ、飛び出したボリュームの下をガレージ、中を個室にしてボリュームの貫通がそのまま空間構成に反映された案である。内部をつなぐような動線がつくられ、シークエンスも楽しい。(竹内昌義)

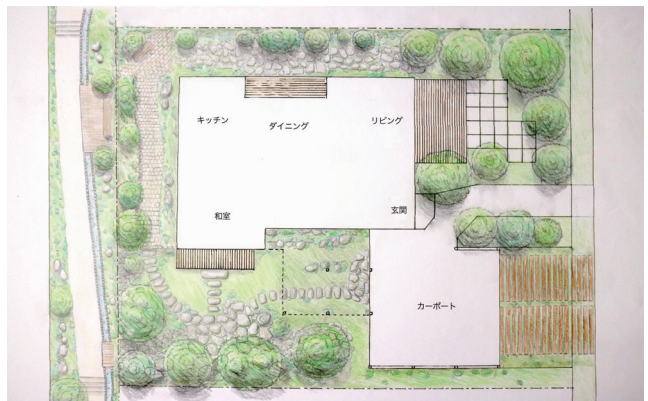


最優秀賞 中川広海

2学年 住宅の外構

この演習は、「住宅の設計」を踏襲して建物周りの外構をデザインする課題である。また、10区画をひとまとまりとした街区の中を貫くフットパス（歩行者道）の計画も含まれている。演習前半は、敷地と周辺環境を改めて分析し、各敷地が周辺の環境や景観の一部であることを認識した上で設計要点をまとめた。また、各敷地内では生活（活動）が屋外へ拡張されることを目指した。現代では、一般的な住宅地は敷地のほとんどを建物が占め、屋外空間はただの隙間空間になりがちである。

川田匠は狭い空間を活かした露地のような空間と、ピロティ状のカーポートをピクチャーウィンドウのように見立て、その先に見える庭を明暗の対比が効いた空間に仕上げた。植栽樹種もよく考え、細い空間と広い空間が脈略のあるまとまった空間になるよう質をコントロールしている。また、その空間がフットパスに続き、景観として成立している。(渡部桂)



最優秀賞 川田匠



環境計画演習1は、通称フィールドワーク入門と呼ばれ、その名の通り、建築や環境をデザインしていく上で欠かせない、現地フィールドでの様々な調査、取材活動の手法やノウハウを経験する演習課題である。本年度より、志村、三浦の教授陣が担当し、歴史的農家建築の調査と農村集落調査を中心にフィールドから学ぶプログラムを用意した。前半は、本学東側に建つ本学所有の農家建築と納屋の実測調査を実施、グループで共同作業として野帳を起こし、実際に測る、写真撮影で現況を記録する、寸法情報をベースに作図するという一連の実測調査を体感するプログラムである。室内外はもちろん、天井裏、床下など普段見ることのできない建築の構造、施工の裏側までを観察し、伝統的な建築の仕組みを知る貴重な体験の機会となっている。途中、建物内外の特徴につき講義を行い、伝統的構法による空間の意味、材料や仕上げの特徴、農家の生活習慣を伝える設え、その形についても解説し、幅広く建築そのものに触れる機会としている。後半は、本学東側に広がる農地岩波地区を対象に農地の現状調査を行い、調査結果を地図上に落とす作業を行う。元々本学敷地や西側に展開する芸工大前住宅街も棚田であったことが示す通り、平成以後農地から住宅街に大きく変化していく本学周辺では、現在休耕地や耕作放棄地が急増している。岩波地区を学生のグループで分担し、地図上に農地、休耕地、放棄地の別を現地調査の上プロットしていく作業は、現在の地域の社会条件を把握し、その課題を実感する好機となっている。双方のフィールド調査体験の内容を最終的にA4、折り込みA3版の調査成果として整理し、手作業の袋綴じ形式で製本し、一冊の報告書の形に取りまとめて完成とする。目に見える形で蓄積され、また緩やかに変化を遂げる地区の歴史変遷、豊かな自然が取り巻く中で、自然と巧みに共生しながら引き継がれてきた生活習慣とその環境を捉え、分析していく、現地の立地条件、周辺環境の特徴を活かした本学ならではの演習課題である。

(志村直愛)

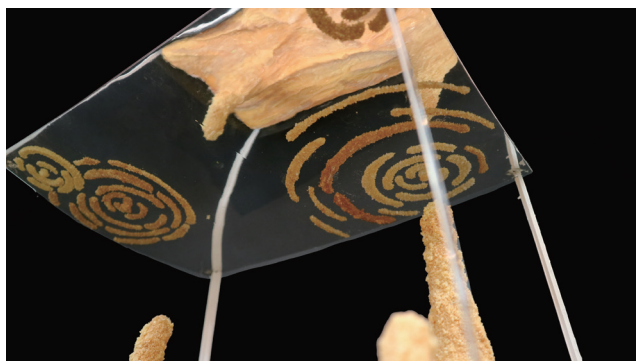


農家実測、現地調査の成果を各自A4版の報告書形式でまとめる（上）
 大学敷地内にある築100年の農家を対象に実測を行う（中）
 上桜田の農村集落を訪ね歩くエクスカージョン（下）

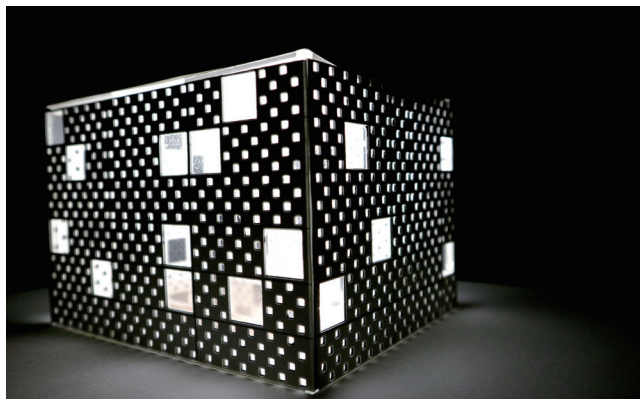
映画・小説・音楽

日常生活の中で接する機会の多い題材を元に自己内部に喚起されるイメージや風景、或いは空間を表現してもらった。ドローイング表現で秀逸だったのが、秋山新作と渡部理子の作品。秋山は、「悪と正義」を二項対立的に捉えるのではなく、一体的な「表と裏」という構図に内包させ、不可分の関係と定義。有機的、人為的な切り込みから垣間見えるグリッド上の人工物との対比も面白い。渡部は、小説内の人間関係や心情を、抽象的に「静寂と暗闇」と捉え、観念的な「森と樹木」により表現している。ドロっとした質感とボカシの手法が「嫉妬」という感情表現にとっても良くコミットしている。

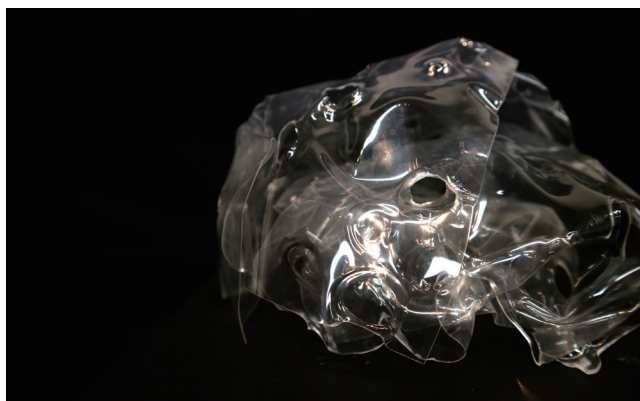
一方、西田真優と久湊美弥の作品は、模型でイメージを膨らませている。西田は、ひとつの曲を頼りにそのストーリーとイメージされる空間を具象化している。添えられているブックレットもイメージ喚起の一助になっている。久湊は、素直に小説の世界と向き合い、そのテキストによって表現されている世界を挿絵的に模型化した作品である。観念的なドローイングとは異なり、目の前にカタチがあり、素材がある。その巧みさと実直さが評価された。



優秀賞 渡部理子(上) 久湊美弥(下)



優秀賞 中川広海



優秀賞 佐々木駿

モダニズム建築の再解釈

3つの課題の中では最も難しく、名作といわれる建築に手を加えることは困難な作業であったように思う。そんな中で中川広海の作品は、オランダのモダニストG.T.リートフェルトに着目し、決して彼の代表作とは言えない作品に大胆にも改造を施した提案だ。19世紀初頭の最も早い時期の規格化されたプレハブという考えを念頭に、現代的な解釈を付加し、均質的な手法でも「多様な空間表現が可能」という命題に積極的に立ち向かった作品である。ひとつ欲を言えば、もう少し内部の空間構成やしつらえに対する提案が欲しかったところである。

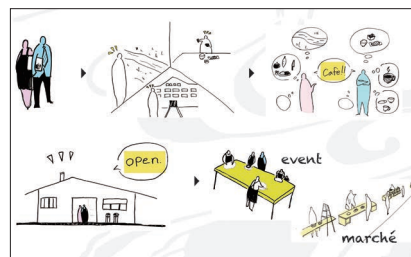
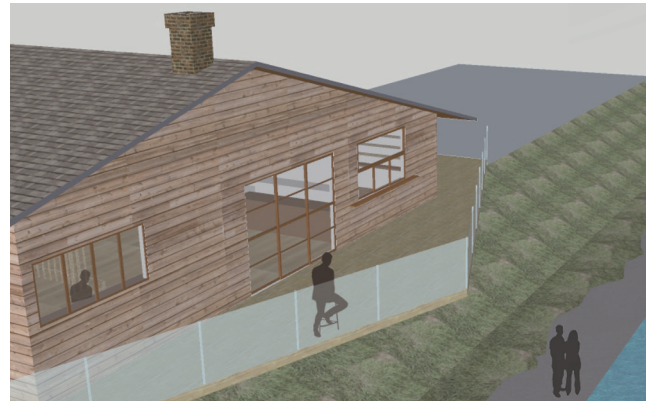
オブジェ

最も面白く取り組みやすい、そして自由度が高く、具象的な表現が可能な内容と思っていたが、「思い」が強いあまり頭の中のイメージを具現化するスキル不足が露呈した課題であった。佐々木駿の作品は、建築としてそのものが非常にオブジェ的な対象物「東京プラダ」のガラスという素材に着目し、特に模型でしか表現され得ない「曲面」を表皮3層重ねることにより、「反射」、「歪み」、「透過」、「光暈」という現象をうまく表現している点(惜しみなくカタチを追求し、プラスチックを曲げながら葛藤した)を最大評価した。(八重樫直人)

3学年 自発的コミュニティと産地直売所のデザイン

次の時代の地域社会のモデルとして、エネルギーや食料を地産地消し、自給的、持続的なコミュニティが模索されている。道端の小さな無人販売の小屋から、道の駅のような巨大な施設まで、産地直売所の解釈の幅はとても広い。地元の野菜を販売する屋台をデザインした作品もあれば、コンビニエンスストアの駐車場に木と土でできた自然素材の素朴な空間の提案もあった。建築のデザインだけではなく、地域の人々との関係性や流通の仕組みまでを提案したものもあった。そのどれもが、希薄になった地域コミュニティを再構築するきっかけとなるような場であり、リアリティの高いものが多かった。

芳賀耕介の作品は川沿いの傾斜地に建つ、レストランと直売所が一体となった建築である。シンプルな切妻屋根と、川の蛇行に沿って整えられたデッキの形のプロポーションが美しい。街と川の間立地し、生活の外にあったはずの水辺が、この建物によってつながり合われることになった。産地直売所に並べられた地元の食材を使った料理を、水辺にせり出したデッキの上で食べる時間はとても気持ちが良さそうだ。素直な造形とプログラムのバランスが心地よい。(馬場正尊)

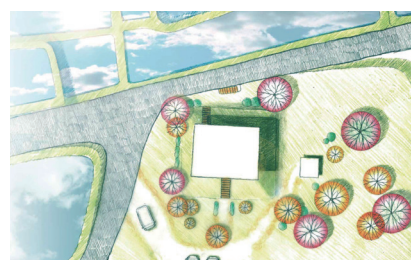


最優秀賞 芳賀耕介

3学年 生産の場となるランドスケープと建築

山形らしい風景の多くが地場に根ざした業いと深く関係する。近年、人口減少、少子高齢化、農業の後継者不足、食料自給率の低迷を背景に、耕作放棄地が目立ち、今後の拡大が懸念されている。この状況の打開策として、第一次産業の六次化や体験型観光との連携が期待される。この演習では、生産の場としてのランドスケープの活かし方と拠点となる建築のデザインを通じて、山形の魅力的な風景の未来像を模索した。

高橋杏咲は、柵田を利用しながら風景の美しさを伝えるために、土地に新たに関わる人達をつなぐキッチンと、そこを利用する調理教室のプログラムを提案した。キッチンは4つの壁と片流れの大きな屋根で構成され、公園の四阿（あずまや）のようにとても解放的なフォルムとなっており、美しい柵田のロケーションにふさわしい。調理する空間を上質にする事でそこでの行為が尊いものとなり、人も風景の一部として美しい要素になるだろう。(渡部桂)

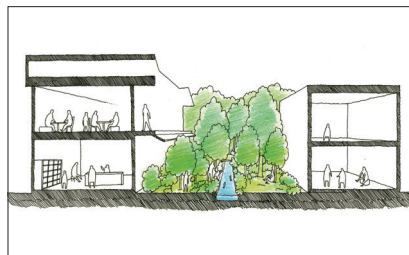


最優秀賞 高橋杏咲

3学年 野生化する都市

建築や都市と植物についての関係性を問い直すための課題。近代において人類はひたすら大地を都市化する欲望に駆られ、地表をアスファルトやコンクリートで覆い尽くしてきた。しかし最近、その価値観は大きな変化の時を迎えていることを感じる。都市や建築は植物と融合したがつているのではないか。近代の都市の風景を形成した、鉄・ガラス・コンクリートという無機物の世界から、植物や生物が支配する有機的な世界へ。僕達の風景への欲望は変化している。この課題では学生と一緒に作品を通してそれらに向き合った。

高橋杏咲の作品は中心市街地から郊外に向けて段階的に都市が野生に戻ってゆくプロセスがデザインされている。人口が減り、建物や道路が植物に覆われ始める風景は、一見寂しそうに見えるが、彼女はそれをポジティブに捉え、理想の密度を追求している。この世代のリアリティであり、淡々と受け入れるべき未来の風景なのだと思う。改めて価値観や風景に対する感受性の変化に気付かされた。(馬場正尊)



最優秀賞 高橋杏咲

3学年 地域の景観・歴史から読み解くSHOPの設計

この演習では、敷地や周辺地域の環境をかたちづくる自然、空間、生活、歴史などの特徴を理解した上で設計することを重視している。課題は、対象地の景観や歴史を調査して、その特徴を読み解きながら、各自がその場にふさわしいと思った機能を有するSHOPの設計である。到達目標は、「敷地および周辺の特徴を読み込んだ機能提案を行うことができる」「周辺の景観や歴史を考慮した意匠設計を行うことができる」「適切な図面・模型表現によるプレゼンテーションを行うことができる」ことである。カフェやバー、地場産材を食材にしたレストランや直売所、地場産業のアトリエや参拝客のための休憩所など、この地域にふさわしい様々な提案が見られた。

最優秀賞の鹿又万理子の作品は、昼と夜で異なる表情を持つ露天風呂のある宿とカフェの提案である。佇まいは伝統的な切妻屋根の土蔵を彷彿とさせるが、山寺を臨む方角に壁面を切り落とした大胆な形となっている。1階にある露天風呂は、昼は参拝客の癒やしの場（足湯）に、夜は宿泊客が山々に囲まれた雰囲気を楽しむことのできる場となり、施設全体としてそれぞれの機能を丁寧に解いてまとめた作品である。(山畑信博)



最優秀賞 鹿又万理子



最優秀賞 伊藤春樹

素材と風土で考えるギャラリーの設計

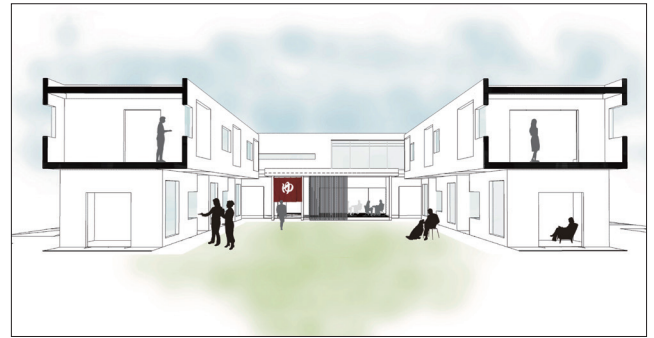
この演習では、素材と敷地の風土を考慮したギャラリーを設計する。まず初めにアーティストを選び、次に敷地を設定する。ギャラリーの主役である作品展示にふさわしい空間のみならず、その敷地の気候や周辺状況などを調査し、木造、鉄骨造、RC造などの構造を選んで、その表現と仕上げに至るディテールを検討してゆく。伊藤春樹の作品は、折り鶴アーティストのためのギャラリーで「和」をテーマとしている。瀬戸内海を望む温暖な高台に建ち、繊細に組み上げられた木格子が醸し出す陰影のある空間が優しく心地よい。(山畑信博)



最優秀賞 佐藤大地

地域コミュニティの核となる木造公共建築

この課題では、地域で子育てを支援し、コミュニティ再生の契機となる木造の公共建築を設計する。公共・木造建築の最新トレンドを検証し、木でつくる空間の特性を活かした建築の計画を求めた。最優秀賞の佐藤大地の案は、必要な場所を中庭を核として門型の架構で連続させた不定形な建築。幅や高さが少しずつ異なる空間には矩形のプランでは得られないおおらかさを感じられた。架構の部材設定には多少の問題点はあったが、緻密なソフトウェアの提案や、活動の様子が伝わってくるプレゼンテーションも高く評価された。(西澤高男)



最優秀賞 細谷佑生・新沼尚大・堀内敦央・飯島かなり

まちの中に住むかたち

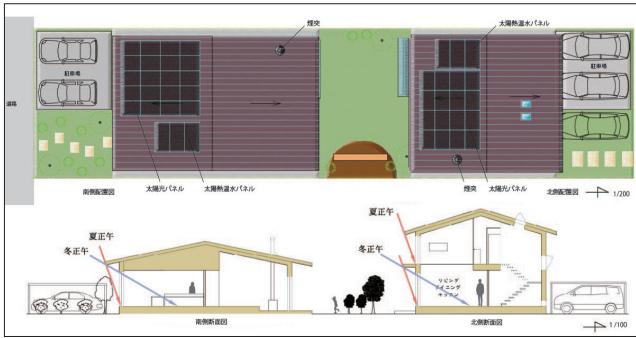
まちと関わりながら住まう集合住宅の共同設計課題。地域の状況を分析し、住み手と社会との関係を考えながらも、集合住宅としての建築計画上の留意点を満たすことを求めた。飯島かなり・新沼尚大・細谷佑生・堀内敦央による案は、浴場とコミュニティキッチン各住戸が囲む中庭型の集合住宅。通りからカフェと中庭越しに見える浴場の構えとメゾネットで中庭と良い距離感が保たれている住居部分の計画、敷地に対するまとまりの良さが評価された。最終講評会では福島を拠点に活躍するアサノコウタ氏を迎え、白熱した議論が展開された。(西澤高男)



最優秀賞 丹野葉月

まちの自然エネルギー計画

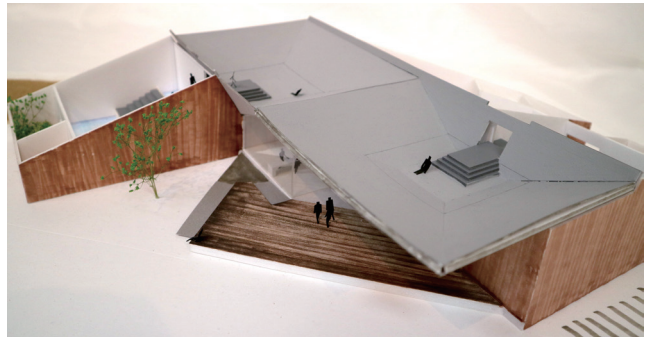
東根市の都市構造とエネルギー資源を調べながら市全体を俯瞰し、東根市を7地区に分けて自然エネルギー導入マスタープランを策定した。また、自然エネルギーのプロジェクトを地域全体にわたって提案し、マップ化していくことで、自然エネルギーを基調とした地域像の将来イメージを描いた。丹野葉月の提案は、太陽光発電、温泉街、もみがらに着目し、それぞれのプロジェクトを規模から費用まで示しながら事業イメージを具体化しており、自治体のエネルギー計画としても十分活用し得る成果だと言える。(三浦秀一)



最優秀賞 菅原美羽

エコハウスの設計

この課題では南道路と北道路の隣り合う2つのエコ住宅を設計する。同じ形状面積の敷地であっても、2つの住宅は配置計画、採光計画など全く異なるものになる。断熱の仕様を決め、エネルギー消費量を計算すると共に、再生可能エネルギーの導入によって削減できるエネルギー消費を計算している。菅原美羽は、老夫婦の家とその子世帯の2つの家を提案した。家同士の間で設けられた庭は孫が行き来でき、環境的には日照の確保、風の通り道となるよう計画された。2つの家族の関係と共に環境をつなぐ優しい住宅である。(三浦秀一)



最優秀賞 菅野真夕

温浴施設の設計

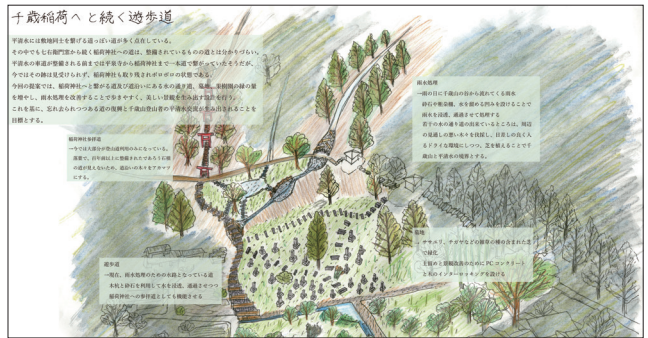
国定公園内の蔵王坊平国定公園を対象に、景観資源を生かした温浴施設を設計する。敷地内外の動線、男女浴場の配置計画、視線に関する配慮や周辺環境との調和などを総合的に考えることが求められた。菅野真夕の案は、視界の開けたすり鉢状の屋根に露天風呂を配し、その下部の形態がエントランスや浴室空間の天井として表れているという、思い切りの良い断面計画が特徴。特徴のある屋根下の空間の活かし方にもう少しアイデアが欲しいところだが、空が開けた露天風呂からの眺めは、さぞ開放的であることだろう。(西澤高男)



優秀賞 山川大地

都市と劇場

山形市の中心市街地、かつて「シネマアサヒ」という映画館があった場所に劇場を設計する課題。駐車場と空き物件が目立つようになったこの通りは、今でも「シネマ通り」と呼ばれ、市民の記憶が蓄積する場所でもある。そこに劇場を復活させ、エリア全体の文脈を再構築する。山川大地の作品は、既存の駐車場を否定するのではなく、存在をそのまま生かし、仮設的なテントや屋台を配置することにより、日常的な祝祭空間を設計している。サーカスのように楽しげだが、どこか切ない空気を持っているのが魅力的だった。(馬場正尊)



最優秀賞 佐藤元紀

ランドスケープ総合デザイン

この演習では、中山間地域にある集落を、地理、自然、土地利用、居住、産業、歴史、文化などの視点から階層的に読み解き、自ら具体的な課題やテーマを設定し、その問題解決を、総合的な環境(風景)としてデザインするものである。佐藤元紀は、集落内の信仰と関係するが消えかかっている道を見つけ出し、土地を維持するための排水路機能と組み合わせながら空間のデザインを行った。歴史文化から空間の意味を掘り起こし、環境的な改善技術を取り入れながら空間的機能と風景のデザインを行っている点が優れている。(渡部桂)

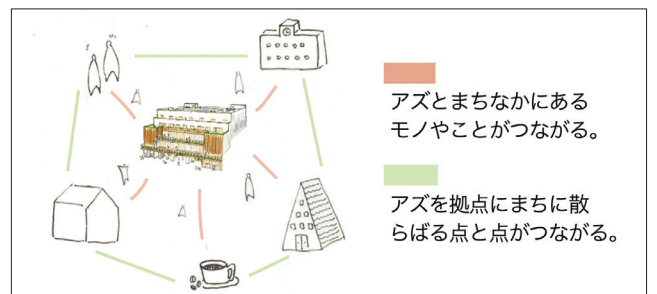
卒業研究・設計 アズ七日町を拠点としたコミュニティの再構築 大場いおり



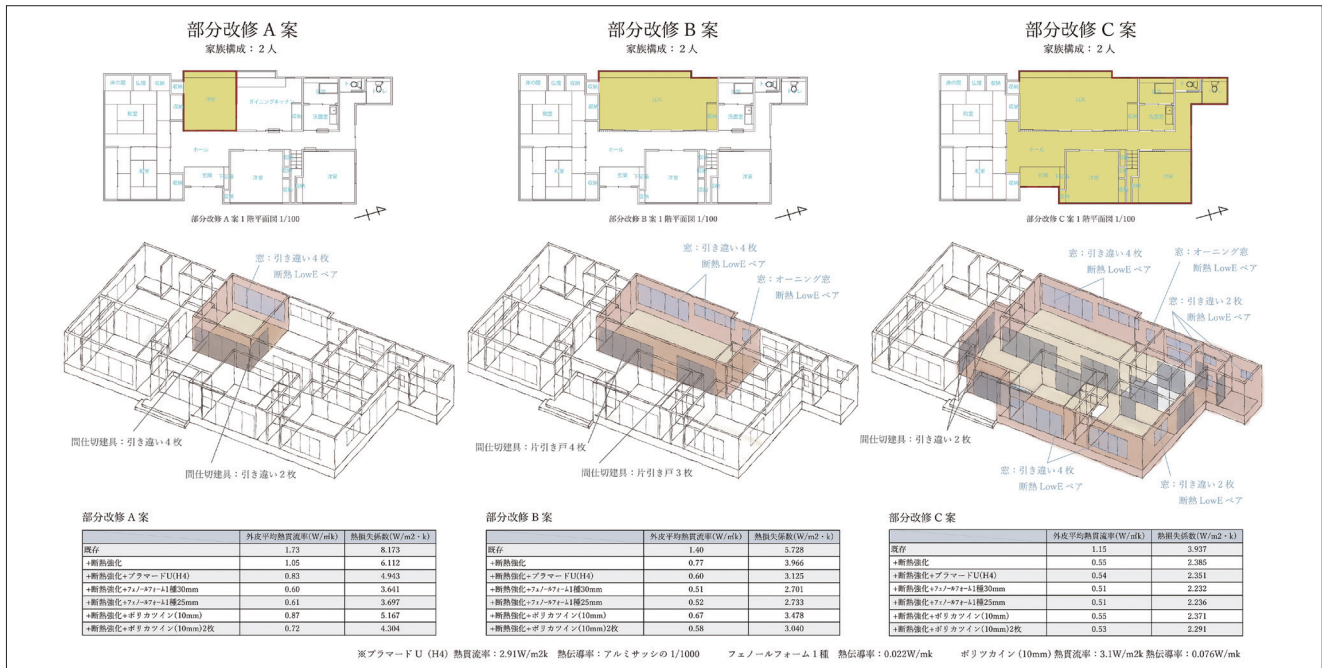
私が生まれ育った山形市の中心市街地である七日町は徐々に衰退し、魅力のないまちになってしまった印象があった。しかし近年、TONGARIビルやBOTA coffeeといった新たな拠点ができ、活気を取り戻しつつある。そこで、七日町の中心にあるにも関わらず、多くの空きテナントを抱えている複合商業施設のアズ七日町を対象に大幅な減築とリノベーションをし、新たなコンテンツを加えることで、七日町のコミュニティの拠点とした。1階は店舗、2階3階は公民館、4階5階には新たに住居とシェアハウスを取り入れ、アズに人が集まることで人と人、人とモノ、人とまちがつながる場所になればと思い設計を行った。ここを拠点に、七日町に魅力的な場所が増えかつての活気を取り戻して行くきっかけとなることを目指した。(大場いおり)

講評

最優秀賞の大場いおり案は七日町のリノベーションプロジェクトである。七日町の中心部、公民館の入るアズ七日町を対象に建物の一部を減築し、様々なクリエイターが集まり住む複合施設へと転換させた。こういったリノベーションは、昨今多くの卒業設計でも見られるが、大抵は現実の与条件を離れ、空想的な案になりやすい。しかし、利用率の低いホールを無くし、建物の中に光庭を作られ環境が改善されている。そういう点で、減築とリノベーションの組み合わせが秀逸であった。プロから見てもリアリティのある点が大いに評価された。(竹内昌義)



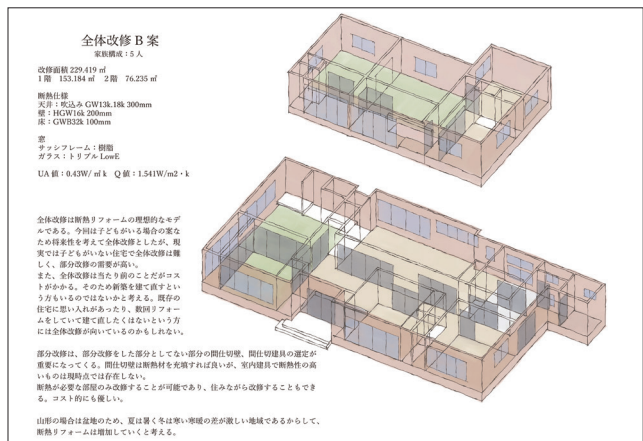
建物内で過ごす人々の様子が細かく表現された模型 (上)
リノベーション後のアズ七日町とまちの風景 (中)
設計に至るまでのコンセプト図 (下)



省エネ住宅は多くの人の関心を集めており、リフォームにおいても注目されてきている。しかし、断熱改修となるとネットで調べても多くの情報は出てこない。そのため、断熱改修をしたい一般の人々への情報提供が必要なのではないかと考え、山形県内の断熱改修の事例調査、断熱改修のモデル提案・設計を研究として行った。事例調査結果では、家全体を改修しているもの、一部のみの改修しているものなど様々あり、それらを元に自宅を例とし断熱改修のモデルを5案ほど設計した。部分的な改修案では間仕切りが重要になってくるため、建具提案も行なっている。山形の場合は盆地のため、夏は暑く冬は寒い寒暖の差が激しい地域であるからして、断熱リフォームは増加していくと考える。(羽角栞)

講評

羽角栞は山形県における既存住宅の断熱改修事例を調査し、それを事例集としてまとめ、さらに自宅をモデルとした断熱改修の提案を行った。特に住宅全体を全て断熱強化する方法だけではなく、部分的な断熱改修という方法を調査検討したことが重要な成果と言える。膨大なストックとなる住宅を新築だけで断熱性能を上げていくのは数が限られることと、床面積の大きい山形県の住宅で使用頻度の小さな部屋までも含めて回収するには費用もかかる。こうしたことから、部分断熱改修はこれから大きなニーズが生まれるものと考えられ、そのための貴重な情報を提供するものである。(三浦秀一)



断熱改修仕様やその効果など、丁寧に説明されたプレゼンボード (上)
全体改修の可能性についても提案 (中)
既存住宅模型と全体改修案後の模型 (下)

今年度の卒業研究は、全体的に建築・環境デザイン学科の特徴がよく現れた展示だったように思う。学生が社会の変化を敏感に、そして体感的に感じ取っている、そんな印象を受けた。人口減少、高齢化、震災の復興、エネルギー、ツーリズム、バイオマスエネルギーなど、これからの社会が解決すべき課題を確実に捉え、それらを汲み取って表現しているテーマが多かった。

例年、取り扱う研究内容として少しずつバリエーションの広がりを見せ増してきているのが、リノベーションの実践をテーマとした作品だ。ワークショップなどを実施することで進められるため、個人の関わりを特定するのが難しいが、そのリノベーションに至った企画、計画など、実践に伴うマネジメントは総合的な活動であり、評価に値するだろう。

論文では、三浦ゼミ生全員がエネルギーやその関連分野のことを扱っている研究であった。個人個人の考えもあるだろうが、まずは基本を押さえて、思考訓練、論文を構築することを重要と考えているようだ。卒業研究は個人に帰属するため、“やりたいことをやれば良い”という考え方もあるが、一度ものごとを冷静に捉え分析して論を組み立てるといことは、社会に出れば常に求められることである。

さて、その中で特筆すべきは羽角葉の「断熱リフォームの可能性—山形県におけるリフォーム事例調査—」、住宅の断熱改修に関する論文である。住宅の性能を上げることは、住まい手の快適性、健康に寄与するが、実際には断熱改修自体があまり行われていないのが現状だ。そんな中で、学生がこのテーマに気付き選び、研究されたことだけでも意義深い。

個別の案をいくつか見てみよう。まずは設計分野。伊藤ゆりの案は、彼女の地元である宮城県石巻市雄勝町に建設される防潮堤と、住宅のある高台をつなぐ建築の設計である。東日本大震災で甚大な被害を受けたことをきっかけに、時に脅威となる



伊藤ゆり「高台と防潮堤をつなぐ建築」

海から集落を守るために進められている防潮堤建造だが、海の恩恵を受けて生活してきた地域にとっては、海と陸の間にひかれる防潮堤はこれまでの暮らしを根本から変えなくてはならない大きな危機となる。そこで、海の景観を地域に残しながら復興を目指すための防潮堤と海をつなぐ施設、そしてその周辺整備を提案した。防潮堤の上に飛び出させた展望台となるデッキやブリッジなどで両者をつなぎ、また、段差状の施設を高台側の壁面に沿わせて、開放的ながらもリズムカルで魅力的な複合施設となっている。

続いて、論文分野。米庄遥の論文は、川崎町および青根温泉を対象に、サイクリングをしている人のための自転車地図を作成するというメディアの提案である。安全で快適なサイクリングを手助けする情報を盛り込んだサイクリングロードマップによって、サイクリスト達を継続的に町へ呼び込み、まちの活性化を目指す。マップの内容は、自身の経験をもとに細かくインフォメーションがされ、交通量、道路状態、アップダウンや安全性、走りやすさに特化した情報が掲載されている。サイクリストが使いやすいサイズ感やボリュームになっていて、実に丁寧な仕上がりがだ。ツーリズムや交通といった側面から考えても興味深い。また、米庄の本研究は、川崎町の地元観光情報誌「かわさきあそび2017春」に掲載されるまでに至った。

作品それ自体からは様々な可能性を感じ取れた。優秀作品は学科教員全員で選ぶため、幅広く共感を持たれる作品に票が集まることになる。一方、学生自身の興味に沿って、エスキースは行われるため、狭い領域をテーマにすると、票は集まりにくい。いかにプレゼンテーションで思っていることを丁寧に伝えるかという点も大切だが、各自のテーマ自体に大きな意味があることを再確認したい。(竹内昌義)



米庄遥「川崎町と青根温泉における自転車を活用した地域活性化」

本年度、博士課程前期課程からは4名が修士号を授与され、新設された「地域デザイン領域」からの第1期修了生となった。

この4名が大学院生となった年度から、地域の課題に対して横断的かつ実践的に取り組むための領域再編が行われたため、学生も教員も、あるべき大学院教育の姿を模索しながらの2年間であった。初めはその変化に戸惑いを隠せなかった学生も多かったが、地域の懐に深く飛び込んで2年間、各々の研究課題と向き合ってきた。

庄司はるかの研究は、人口減少曲面に於ける中山間地域の今後の土地利用の在り方について検証している。どのような自然環境の在り方がその土地にとって有効なのか、判断材料になるような選択肢を示すというものである。これは、蔵王西麓の八森地区で地域の水資源を守りながらコミュニティを維持するための場所と方策を提案するという卒業研究を発展的に継続させたもので、これまで適切に手が入り、活用されてきた「二次的自然」を人口減少によって維持出来なくなったときにいかなる選択肢があるかを提示している。これは、保全範囲の選択と集中を図り、その維持を断念せざるを得ない場所ではその地域にふさわしい一次自然へと移行させてゆくべきであるという提唱*1をもとに、いかなる判断基準で保全する範囲を選択すべきなのかを考察しているもので、その判断を地域住民に委ね、その判断材料を揃えるために広範囲なスケールでのゾーニングを、地形図の変遷と詳細な実地踏査により視覚化している。ランドスケープ分野の研究成果として引き継がれてきた精度の高い調査と緻密なプレゼンテーションは、その地域が持つ地誌を思い描かせるのに十分な力を持っていた。

菅原かずさの研究の対象は、大学近くの集落の建築や生活の様式を調査し、環境に根ざした生活の場となる懐かしくも新しい住宅を提案するというもの。地域の住宅の形態だけでなく生

活や文化まで踏み込んだ調査は意義深いが、その先の研究に基づいた明確な提案まで至っていなかった点が惜しまれる。

深澤発の研究は、これまであまり注目されてこなかった仙台周辺の近代建築を調査し、保全活用の可能性を探るといふもの。世の中の状況が大きく変化する中で、研究対象となった建築物の今後を考えることは急務であるという社会的な意義、そして地道な研究の積み重ねが評価され、修士研究で最優秀賞を授与された。今後、この貴重なデータベースが広く公開され、当該建築物の価値顕在化に寄与することになればと願う。

永田光司の研究は、セルフリノベーションによる居場所づくりに実践的に取り組み、その方法論を一般化するというもの。全国各地で施工を手伝いながら先達に学び、自らも上山や天童で参加型のリノベーションを実践。リノベーションを目的化するのではなく、どのような目的に至る手段と考えるのか、その理論構築はまだ途上である感は否めないが、徐々にかたちを現しつつあり、少しずつ地域を変えてゆく原動力となっていることは大いに評価出来る。さらに、彼の手伝いをしていた後輩達にも、セルフリノベーションの遺伝子が引き継がれているようである。彼自身も、研究での実践的な取り組みをそのまま活かした仕事を続けており、今後の活動に期待したい。

修士課程に在籍した学生達はそれぞれ社会に旅立ち、それぞれの日常の業務に従事している。もちろん、2年間という短い時間で研究を完遂することは難しい。しかし、様々な日常の中でも生涯取り組んでゆける研究課題と出会い、そのスタート地点に立てたのであれば幸いである。(西澤高男)

*1「撤退の農村計画―過疎地域からはじまる戦略的再編（2010年／学芸出版社）」共著者の一ノ瀬友博氏の提唱による。



庄司はるか「山形市八森集落の20年後の土地利用頻度推測図」



永田光司「セルフリノベーションした天童シェアハウス『基点堂』」

プロジェクト 飯豊町エコタウンプロジェクト



ワークショップで様々な意見を出し合う

飯豊町椿地区にあるエコタウン建設のためのプロジェクトである。学生と共に地元住民とワークショップを行い、どういったエコタウンを作るか、その拠点施設はどんなものかということと専門家の講師を交えて5回、紫波町への視察ツアーを1回計画した。町の若手と重鎮のチームが集まり、専門家がレクチャーをし、テーマごとに話をする。テーマは公民連携の手法（紫波町役場鎌田千市さん）、バイオマスやエコハウス事情（三浦秀一、竹内昌義）、公共空間（馬場正尊）、ランドスケープ（渡部桂）という構成。いずれもエコハウス、エコタウンを作るためには必要な知見である。極めて専門性が高い会議なのだが、誰にでもわかりやすい。今後、自治体でこういったエコハウスを作るときも同じようなプロセスのワークショップが必要であると実感したプログラムであった。

実際のところ、飯豊町はかつてバイオマスの導入やエコハウスの取り組みをしてきたが、継続するのが難しかったため、10年前のそのままの姿の施設が見受けられた。ただ、この分野の進歩は早くめまぐるしい。後半の専門家へのヒアリングも合わせて、より具体的に現在も計画が進められている。

（竹内昌義）



町長に最終プランをプレゼン

プロジェクト 江差町「職人の棲家」 ゲストハウスプロジェクト



制作中の寝台家具ユニット

かつて鯨漁で栄えた港町、北海道江差町。当時の面影を残す建築や蔵が点在しているが、人口減少や高齢化により、建物自体の維持管理が課題となっている。日本海の海岸沿いにある歴史的な街並みを保全している地区では、空家となった古い建物や蔵を活かし、地域で活躍する職人たちの人的資源とあわせて「ものづくり」を軸とした滞在型の交流を促進しており、西澤高男研究室ではこれまで3年に渡っていくつかの拠点の整備に関わってきた。

江戸時代の蔵を改装したカフェや空き店舗を活用した工房など、エリア内で整備が進む中で、長期滞在に適した安価で快適な宿泊施設が求められ、今年度「ハウジングアンドコミュニティ財団」より助成をいただき、港近くの空き店舗にゲストハウスを整備した。

もともと飲食店だった比較的広い空間を限られた予算でゲストハウスに改装するために研究室でアイデアを持ち寄り、「大きな家具」案、「動く家具」案、「キャンプでお泊まり」案の3つを提案し、現地での議論により設置場所の変更やより多くの空き店舗への展開に対応の出来る「動く家具」案に決定した。その後、細部の提案や寝台内の快適性などの検討を重ね、模型と実施設計図を作成。それをもとに、地域のNPOと江差技能者協会の指導協力により現地で寝台家具づくりワークショップが行われ、2016年度末に基本的な設えが完成した。

作業を協働したことによる町民との相互理解が得られたこと、そして完成した家具を目の当たりにして可能性を共有出来たことで、2017年度より江差町から家賃や必要な活動費の補助を受けながらの暫定的運用が始まった。今年度から、滞在者と共に作りあげてゆく「みんなでつくる職人の棲家プロジェクト」が始まり、江差の新たな滞在空間のモデルとして展開する予定である。（西澤高男）



R nightトークショーのテーマは「僕たちが出会いたかった夜」

山形R不動産は、地元企業、千歳不動産と大学が連携しながら、山形のまちなかの空き物件を再生する産学連携プロジェクト。学生達とは、これまで10以上の実際のリノベーションを手掛けている。「山形R不動産」というウェブサイトを運営しながら、まちなかの空き物件をリサーチ、それをどう変えていくかの提案を行う。そこから生まれてくる実際のリノベーション設計の仕事が学生達を中心となって進める。学生時代からリアルな設計・監理の現場に関われるのが特徴だ。この経験を活かしてリノベーション・デザインの企業に就職していった学生達も数多くいる。仕事が生まれる瞬間から、それをどう実現するか、社会との関わりはどうかなどを試行錯誤しながら日々取り組んでいる。

現在、単体の建築から、まちへと面的に活動を展開し、まちを変えていくエンジンとしての役割を模索している。地方都市における大学の関わり方、情報発信の仕方、そしてリノベーション・カルチャーの醸成など、「山形R不動産」というメディアを軸にして活動を行っていく。今年度はシネマ通りのエリアリノベーションを継続し、空き物件を一夜だけのクラブに変えたり、複数の空き家に対しての使い方の提案などを行った。行政や地元企業等との連携も強くなりつつあり、さらに実践的なプロジェクトが動き始めている。(馬場正尊)



多くのバンドが山形の夜に音を響かせた



各ユニットに分かれて短期間の中でプランを磨いていく

リノベーションスクールとは、エリアと物件を具体的に設定し、実現を前提としたワークショップ型のスクール。2泊3日の合宿で、リサーチから企画、設計、事業計画までを一貫して学びながら組み立てていくのが、大きな特徴である。現在、新しいまちづくりの手法として注目され、全国で展開されている。3年前は山形市内をフィールドとして、そして昨年は鶴岡市の中心市街地、山王商店街を対象エリアに設定して開催された。ちなみに、山形市ではこのスクールをきっかけとし、複数の具体案件が進み、シネマ通りのエリアリノベーションへと発展していった。

鶴岡市で取り組んだ案件は、長年空き物件になっていた醤油屋の再生とエリア全体の価値を再発見し発信していく方法論を組み立てるといったものだった。醤油屋の再生は、古く趣のある建物の特徴を生かし、宿泊施設にコンバージョンすることでまちに新たな顧客層を取り込む空間と手法が示された。さらに地域の空き物件と事業や人材をマッチングする仕組みの提案など、ハードとソフトを横断したエリア再生の方法論が提案された。

このスクールをきっかけに、地元の有志が集まりプロジェクトの実現に向けての試行錯誤が始まっている。現場に入っただけの実践を重視する本大学ならではのプログラムである。

(馬場正尊)



時にはピリッと真剣な空気を放つ受講生達



春夏秋冬をイメージしたツリーハウス

今年度も多くの新生が入参加し、川西町立東沢小学校の裏手にある「教育の森」を拠点として活動を行った。まずはチームを組んでデザインの検討を重ね、小学校の先生方にプレゼンを行った。その結果、「四季」を表現した案が選ばれ、実施のための設計に移った。花を表現した「春秋」棟、虫かごを表現した「夏」棟、雪の結晶を表現した「冬」棟と、3棟の建設となり、限られた時間の中で、2年生が中心となり1年生を率いて詳細設計と施工を行った。廃校舎を利用した「おもいで館」で寝泊まりし、当番を決めて自炊し、昼は小学校の家庭科室でお弁当を食べるといった合宿生活であった。

3年生は、小学校に建設されていた既存のツリーハウスの本格的な補修と、子ども達が屋外で活動する「大空教室」の机と椅子のデザインと製作を受け持った。小学校の先生方や地域おこし協力隊の方の他、地元住民の方々のもてなしも温かく、学生たちも和気藹々と作業を進めていた。小学校で行われた地域の運動会にも参加し、若者らしい澁刺とした動きが人目を引いた。お披露目会では、子ども達が初めは怖がりながらも、思い思いに遊び回ってくれて、学生達の苦労は結実した。

代表の但木美咲（3年生）が「山形新聞」や「山形の家づくりの本2017年版」でインタビューを受けて紹介されたり、盛岡で行われた日本図学会東北支部の講演会で発表を行うなど、対外的にもプロジェクトをアピールすることができた。段取りよく作業しなければならないプロセスに戸惑いながらも、学生達は一歩ずつ成長してゆく。（山畑信博）



蔵座敷にある襖をちぎり絵で飾る

今年度は、山形市内の蔵主さんから相談があり、清掃や実測、さらに模型製作を行い、意向に沿ったりノバージョン案を提示したが、予算の都合で実現には至らなかった。そのため、昨年同様に上山市榎下宿での活動が中心となった。

近年は地元の方達との交流の機会も増え、「羽州街道榎下宿研究会」の定例会には学生達も参加し、その場で自分達のプロジェクト案をプレゼンして地元住民の同意と協力を得ながら活動を進めている。古民家「山田屋」では、様々なイベントを行ってきたが、今年は1階の土間（三和土）となった蔵座敷にある襖を「ちぎり絵」で飾り、伝統的な空間でありながら、斬新なテイストを醸し出す空間に変える試みを行った。真っ白な襖紙に、事前に染めた和紙をちぎって、花をあしらった下絵に、学生と子ども達が和紙を貼り付けて行くが、次第に周りで見ている大人達も参加して楽しんでくれた。昼食では学生が手製のおにぎりを振る舞って、和やかな雰囲気終始した。

また、今年度は「木の建築フォーラム」が主催する「木の建築賞」に応募し、1次の書類審査、2次の公開プレゼン、3次の現地審査を経て、「木の活動賞」を受賞することができた。学生たちの活動がきっかけとなって、地元の人達も建物周辺の整備（芝生貼り、生け垣の設置、ブロック塀を覆う黒板貼りなど）を進めており、地域住民と学生が協働で行った活動が評価された。（山畑信博）



小原木中学校廃校舎の利活用について学生が提案

震災から5年。高台移転の分譲地に家々が建ち、住宅地が現れた。一軒一軒の家はエネルギーなども考えられ、高性能である。それらは新しく、地方の新興住宅団地と紹介されてもあまり違和感はないだろう。プランをお手伝いさせていただいたお宅にお邪魔したところ、とても住みやすい生活を送っていた。近代的で合理性のあるプランは、それまでの伝統的な座敷が並ぶ構成ではない。何を引き継ぎ、何を捨て去るか、新築するとき常に考えなければならないことだが、この集落は津波で全てが流されている。それぞれの家の形はモダンだが、暮らし方は以前の延長線上である。だからこそ、これから新たなコミュニティが生まれてくることだろう。

あと残すは数軒の住宅と集会所だけとなった。本年度は大沢全体のコミュニティを考える「大沢かえる教室」が学生を中心に行われた。子供達もどんどん大きくなっていく。

これからの課題はいろいろある。低地の利用、出山とのネットワーク、まちづくり会社の設立など、遠い将来に向けて、共同体の在り方が問われていく局面に変化しつつある。

(竹内昌義)



大沢地区の竹を使って、子供達と水鉄砲づくり



地元蔵王の小中学生と地形模型を積み上げる

山形市の南東に連なる蔵王連峰の中腹に、温泉やスキー場を抱える蔵王温泉の市街地がある。2015年当時、蔵王の噴火活動の兆候が指摘され、まちの人々は生活不安と観光低迷に悩むこととなった。そんな中、ここに小中併設校としてある蔵王第二中、第三小学校で、地元の子供達が自身のまちを知り、まちに誇りを持てるようにと、蔵王温泉の市街地と蔵王のシンボルたる御釜までを含んだ蔵王の山並みの立体ジオラマ模型を製作し、校内に展示したいという希望が生まれ、きらやか銀行教育福祉基金を活用したプロジェクトとして動き出したが、予算の折り合いがつかず、頓挫した状態にあった。縁あってこの相談を受けた志村直愛研究室が子ども達のために快諾。志村教授とゼミ学生達が協力し、蔵王模型の製作を計画した。学校と御釜までを含めて指定の1m×1m範囲で収まるよう、縮尺を1/5000に設定し、2mm厚のスチレンペーパーを約100枚等高線に沿って切り出しながら重ね貼っていく、いわゆるコンタ模型を製作。ベースボードや解説プレートなど全てを手作りで準備した。仕上げには、リクエストに沿って新緑の夏の風景とし粉碎した乾燥水苔を着色したオリジナルの仕上げ材を用い、建物群、ロープウェイ、リフトなど詳細なジオラマをつくり込んで、およそ1年をかけて完成させた。途中、6月には大学見学を兼ねて小中全校生徒17名を大学に招き、模型製作の講義の後にコンタ積みの体験練習を経て、実際の模型の山頂部分を手伝ってもらい、作品を共同製作とした。3月、卒業式を前に現地へ納品。市内テレビ局3社、新聞社3社が取材に訪れ、賑やかに引き渡し式が行われた。児童生徒達からは、自分の家を見つけられてうれしかった、自分達のまちと蔵王の関係が改めてよくわかり、人々の生活が蔵王と共にあることを再確認したなどの感想が寄せられた。(志村直愛)

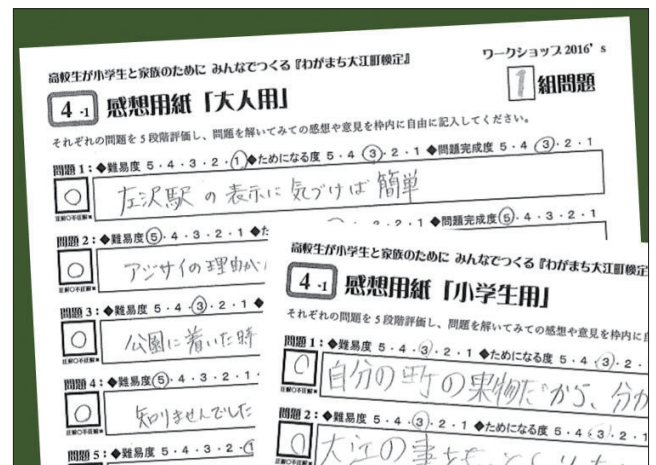


田植えをする学生達

今は住宅地となっている東北芸術工科大学の前には、かつて棚田が広がっていた。大学そのものも棚田であった農地を買い上げ、田んぼを潰して建てられた。古くからの上桜田の住民にとって、田んぼを手放すことは当時大英断であった。入れ替わっていく学生や教員には、当時の上桜田の棚田の風景や住民の思いを知る人はいなくなっていくものである。住民はそのことを寂しく思っているであろう。

田んぼは山形の風景ランドスケイプの基本を成すものであり、日本人の食の基礎でもある。特に芸工大付近の棚田は里山としての貴重な環境も有している。大学の目の前にあった棚田はなくなってしまったが、すぐ裏手には昔ながらの棚田が残っている。棚田がこれほど近くにある里山の大学は日本中探してもないだろう。この美しい棚田はどのようにつくられ、どのような環境を生み出すのか。この貴重な棚田から学ばずして、芸工大で環境を学ぶ価値は半減するといっても過言ではないだろう。しかし、農業のおかれた環境は厳しく、上桜田の棚田も耕作放棄地が目立ち始めている。

米づくりプロジェクトは大学から歩いて5分もかからないような近くの棚田で米づくりを体で感じながら、こうした社会問題や地域にも直接触れていくものである。そして、この米づくりプロジェクトの重要なところは、多くの地元住民の協力によって成り立っているところであり、田植えから稲刈り、収穫祭などの行事まで、様々な場面で温かい交流の場面がある。そうした場面から触れることの出来る農業の生の声、そして地域コミュニティの様子、そういう住民の顔がリアルに見えてこそ本当のまちづくりが出来るのであり、大学もまた地域の一員となるのであろう。(三浦秀一)



高校生から小学生へ、検定問題がつなく新たな世代交流の形

国の重要文化的景観に選定された大江町左沢地区では、選定範囲内の商家の修理などが始まりいよいよ整備計画が動き出したが、一方町民意識の強化などソフト面での取り組みも欠かせない。例年その一環として町内にある左沢高校の生徒を対象としたワークショップを志村直愛研究室が担っているが、本年度は、自らのまちを知り、先人と共有し後進に伝える世代交代を実現する取り組みとして、いわゆるご当地検定を活かし、高校生が地元の魅力や特徴について出題した左沢検定の問題を用意。地元の小学生に解いてもらい、まちへの興味関心をバトンタッチしていく仕組みをつくることとなった。まずは左沢高校の1年生100名全員が各自で資料、現地調査を行い左沢の検定問題と4択の解答案を作成。グループを組み自ら解きながらブラッシュアップ、ベスト問題を選出する。選ばれた各クラスからの30問を志村研究室のゼミ生が検証し、改善アドバイスを入れて返す。高校生達はこれを受けて最終問題を作成。3クラス別対抗で10問ずつの左沢検定が完成した。これを、左沢小学校の6年生に手渡し、まずは自力で、続いて家族にアドバイスをもらいながら解答し、その感想を寄せてもらい高校生にフィードバックしてもらった。何よりもまず高校生が地元のまちを知り、後輩達を思いやって問題を検討すること。それ自体が小学生へ世代のバトンを渡し、自宅では両親、祖父母などとまちについて話し合うきっかけを提供し、複合的な世代交代を実現できた。実はこの取り組みでは、ワークショップや問題集、感想シート作成など事前準備作業が膨大な事が課題であるが、一度完成すれば検定問題を増やし成長する仕掛けになるはずである。難易度の異なる多くの問題を編み出す高校生がいたり、子どもより真剣に問題にチャレンジする親御さんがいたりと思わぬ副産物もあったが、気軽にできるまちへの関心を高める仕掛けは、継続的に活かされていくと期待される。(志村直愛)

プロジェクト



小屋づくりプロジェクト

本プロジェクトは、金山町の旧林業センターを拠点に学生達が自由な発想でリノベーションを行っているものである。今まで、2階を宿泊施設、1階をギャラリーに改装し、さらにドラム缶風呂の設置、カウンターやテーブル、収納ボックスの製作、マルシェやライブなどのイベントを行ってきた。今年度の活動は、トイレや風呂などの水回りの充実化と、「草木染め」を行った。自然に恵まれた施設の周辺を散策し、染料となる草花を摘んできて煮出し、バッグや小物袋などを染めて、地元の方々も交えて楽しくイベントを終えることができた。(山畑信博)



森づくりの会

森づくりの会では、これまで植樹や間伐、木工体験などを大学周辺の森を中心に行ってきた。2012年からは活動場所を広げ、山形県最上町（特別養護老人ホーム紅梅荘）での植樹活動や間伐材を用いた木レンガ舗装、2014年からは山形県新庄市で間伐材を用いた木工製品の開発や中学生を対象とした木製カトラリーの制作体験などを実施してきた。2016年度も最上町での植樹活動と新庄市での木工製品開発を継続活動として行った。新庄市では「キトキトマルシェ」にも参加し、一般市民向けに木材利用のPRを行った。(渡部桂)



タウン・ワークス

山形市中心市街地のまちづくり団体である「ほっとなる通りまちづくり協議会」(七日町・本町・十日町商店街、国、県、市、県警)とタイアップし、まちづくり提案を行うプロジェクトである。協議会は月1回のペースで行われ、その場に学生が加わり、自分達の提案を発表、議論に参加するという実践形式をとっている。2016年度は、建築・環境デザイン学科の学生10名ほどが参加し、まち歩きをしながら「ほっとなる通り」の歩行者空間デザインの検討を行った。ポートランドの郊外で見たハンギング・バスケットの実現を目指している。(吉田朗)



東北芸術工科大学校友会15周年記念「大同窓祭」

2016年6月25日(土)、校友会設立15周年を節目とした記念大会が、山形国際ホテルで開催された。「大同窓祭」と銘打った同会は、卒業生、新旧教職員300人が参加し盛会となった。子ども連れの卒業生も多く、会場内は終始賑やかな雰囲気にもまれ、いたるところで懐かしい再会の歓声が沸き起こった。環境デザイン学科卒業生によるマジックショーや、山形の特産品や卒業生作品が当たる大抽選会が会場を大いに盛り上げた。また、25—26日に大学を会場に開催された卒業生マルシェも多くの人々が来場があった。学科卒業生によるコーヒーや竹細工の店も出店され、賑わった。(渡部桂)

各種講演会と執筆活動



ワンデイプロジェクト 西田司氏

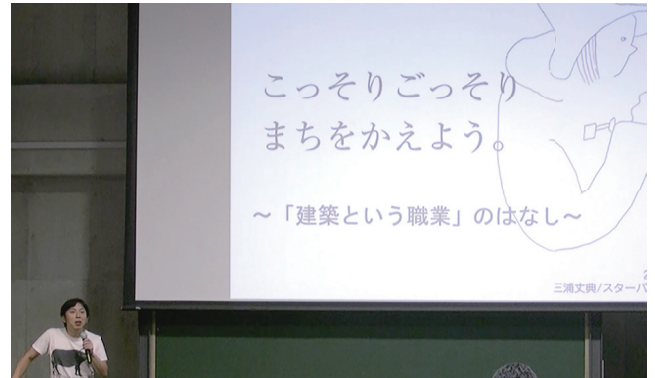
神奈川県横浜市を拠点に、建築デザインのみならず暮らし方をも提案する建築設計事務所オンデザインパートナーズ。今年度のワンデイプロジェクトは、そのオンデザインを率いる西田司氏をゲストに行われた。西田さんは、実際の設計で建築という手段を用いてさまざまな要素を「ひらく」ことで、そこに住む人々にエネルギーを与えている。

テーマは「公共」である。公共とは個人所有ではない、みんなのもの、みんなの場所である。近年、公共という概念は変化してきている。公園など管理のための規則が多くなり、いろいろなことが禁止されるようになった。そういった不自由な状態は、私たち全体にとっても楽しいことではない。もっと自由にやるには、使う側もその意味を考え、責任を持つことで変えていけるのではないかな。そういった意欲的な試みも多く行われていることから、非常に興味深いテーマであった。

優秀賞、そして西田賞のダブル受賞となった川田匠の案は、公園をパーツ化し、まるでパズルのピースで構成されたような作品。いきなり道が無くなっても、ただ真っ直ぐに並べても、足りないと思ったら足し、要らないのであれば無くせば良い。今この時いる人々によって作りあげられる、正解のかたちがない公園だ。自分だけではなく、全ての人が関わり、考えることをコンセプトとしたこの案は、潔くも優しい印象である。(竹内昌義)



川田匠「Together with everyone」



環境的未来型 三浦丈典氏

三浦丈典さんは新しいタイプの建築家だ。新しいのは建物だけではなく、そのつくり方、その使い方、つまりコンテンツにまで関わるといふ点で新しい。それまでの建築家は敷地の中で、クライアントが考えたプログラムを実現するために活動していたが、それだけではない。そのプログラムまで一緒になってつくり、考える。また、三浦さんはまちに関わろうとする建築家でもある。建物単体だけではなく、もっと広く関わりたいとのこと。ハード面だけではなく、プロセスまでも設計する建築家はこれからどんどん増えていくのだろう。(竹内昌義)



第3回復興支援活動連絡会

2017年2月10日(金) 本学科ギャラリーにて開催。東日本大震災から5年、変化する被災地の状況が報告された他、震災復興をテーマとした卒業制作の発表も行われ、学生の視点も交えた今後の支援の在り方と継続について意見交換がなされた。報告者: 気仙沼大沢(建築・環境デザイン学科有志) / 石巻代島(阿部聡史・風土デザインアトリエ) / 石巻雄勝(TRST東日本復旧復興計画支援チーム) / 仙台南蒲生(岡井健・都市デザインワークス) / 三島早戸(建築・環境デザイン学科) / 石巻雄勝(伊藤ゆり・学生) / 気仙沼(三浦拓・学生)。(渡部桂)



新建新聞社
2016年8月31日
ISBN 978-4-86527-059-4

あたらしい家づくりの教科書 竹内昌義

エネルギーを減らすエコハウスは、同時に快適でもある。だが、専門家が説明すると途端にわかりにくくなる。しかし、そのような伝え方では一般の人にはなかなか通じない。できるだけ優しく、一般の人に向けて書いた本をつくらうと、多くの専門家の知恵が整理された一冊である。わかりやすいと言っても、断熱の重要性、その施工の重要性、事例など、大事なツボはきっちり押さえている。表現は優しいが、これくらいのことをしなくてはいけないという数値を明記した。わかりやすいけど、意味がある。そういう本である。



学芸出版社
2016年5月21日
ISBN 978-4-7615-2622-1

エリアリノベーション／変化の構造とローカライズ 馬場正尊

建物単体、点のリノベーションがネットワークしエリア全体に変化が波及していく状況をエリアリノベーションと定義し、そのメカニズムを分析、構造化を試みている。今までの都市計画やまちづくりはヒエラルキー型で計画的に物事が進められてきた。しかし人口減少や財政基盤の不安定さにより、それは通用しない社会となった。その次の概念、方法として「エリアリノベーション」を提唱している。それは、計画的ではなく工作的に都市に向き合っていくもの。実践の中から導かれた理論と手法がまとめられている。



農山漁村文化協会
2017年3月28日
ISBN 978-4-540-16115-5

世界の田園回帰 —11ヶ国の動向と日本の展望— 三浦秀一

東北のモデルとなる欧州の森林国オーストリアの山村で、目を輝かせながら自分達がつくったバイオマスエネルギーの施設を見せてくれる農民に何度も会った。欧州では森の農民がエネルギー革命を起こしており、森林をエネルギー資源に転換することで山村の地域経済を活性化させている様子は驚きであった。過疎化に悩まされる日本の山村に必要なのは、この活気と自信であると痛感した。都市化は世界を覆いつくすかのように見えたが、世界各国では地方への田園回帰という兆候が表れていることが本書からわかる。

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2016

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2016

発行日 2017年7月29日

編集 西澤高男 金子明日香

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 田宮印刷株式会社

製本 田宮印刷株式会社

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail nyushi@aga.tuad.ac.jp



東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail nyushi@aga.tuad.ac.jp